

# 楽しく 見て 学ぶ 博物館

## Museum News

徳島県立博物館

No.85

# ニュース

## 蒔絵の名工・装飾の美

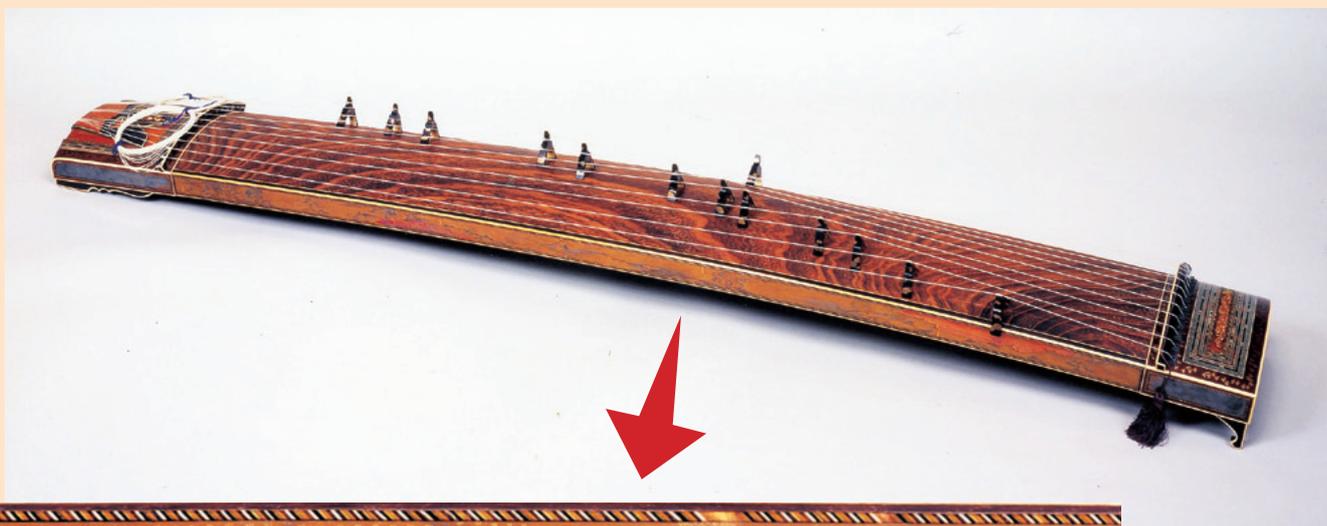


図1 箏(銘九江 徳島県立博物館蔵)

図2 瀟湘八景蒔絵 平沙落雁 飯塚桃葉作

図1は、一般に「こと」と呼ばれ、「琴」の字が当てられますが、正確には「箏」といいます。色々な材料を用いて美しく装飾された箏で、「九江」という名前が付けられています。

本体は、琴師の石村因幡が元禄5年(1692)に作りました。側面の帯状のスペースには、飯塚桃葉(号観松齋知足 ?—1790)が瀟湘八景を蒔絵しています。銘によると、この蒔絵は天明2年(1782)9月に完成しています。桃葉は江戸に住んだ蒔絵師で、阿波の大名蜂須賀家に抱えられました。

瀟湘八景は、中国の名勝にちなむ8つの風景からなります。図2は、八景のうち「平沙落雁」と呼ばれる景の後半部です。写っていない前半部は、空から雁の列が降りてくる岸辺の情景です。後半部は、木立をはさんで刈田が遠くまで広がっています。

(美術工芸担当：大橋俊雄)

ワー！  
きれい



# 外国からやってきた小さな侵入者<sup>しんにゆうしゃ</sup>

## —分布を拡大させる3種のグンバイムシ—

山田 量崇

グンバイムシという虫をご存じですか？体長3～4ミリの小さなカメムシの仲間で、背面に網目状の脈をもつちょっと風変わりな姿をしている昆虫です。名前は、幅が広くて扁平な体形が、相撲で行司が持っている軍配団扇に似ていることに由来します。この仲間は植物を餌とし、ストロー状の口を葉に突き刺して汁を吸うため、一部の種では、農作物や園芸植物に被害を及ぼす農業害虫として知られています。小さくてなじみのない虫ですが、私たちの身近には、外国からやってきて日本各地へ分布を拡げているグンバイムシが暮らしています。今回は、そんな小さな侵入者について紹介したいと思います。

### どうやって外国からやってきたのか？

グンバイムシは、成虫、幼虫ともに一生を植物上で過ごします。また、メスは産卵の際に植物組織へ卵を埋め込みます。そのため、植物とともに他の場所へ長距離移動することが可能です。つまり、苗木や植木の輸送など、人の手によって簡単に持ち運ばれてしまうわけです。日本ではこの15年の間に、海をわたって侵入したであろうグンバイムシが3種発見されました。

### ヘクソカズラグンバイ

*Dulinius conchatus* Distant, 1903 (図1)

東南アジア原産で、1996年に伊丹空港周辺で発見されました。空港近辺で見つかったため、航空貨物に付着してやってきたと考えられています。その後、関東や九州、最近では四国にまで分布が拡がりました。ヘクソカズラという雑草に寄生するため、なかなか注目されませんが、多くの場合、公園や駐車場といった身近な場所で見つかっています。現在、加藤敦史氏(東大阪市)との共同で、四国におけるヘクソカズラグンバイの分布拡大状況を調べ



図1 ヘクソカズラグンバイ

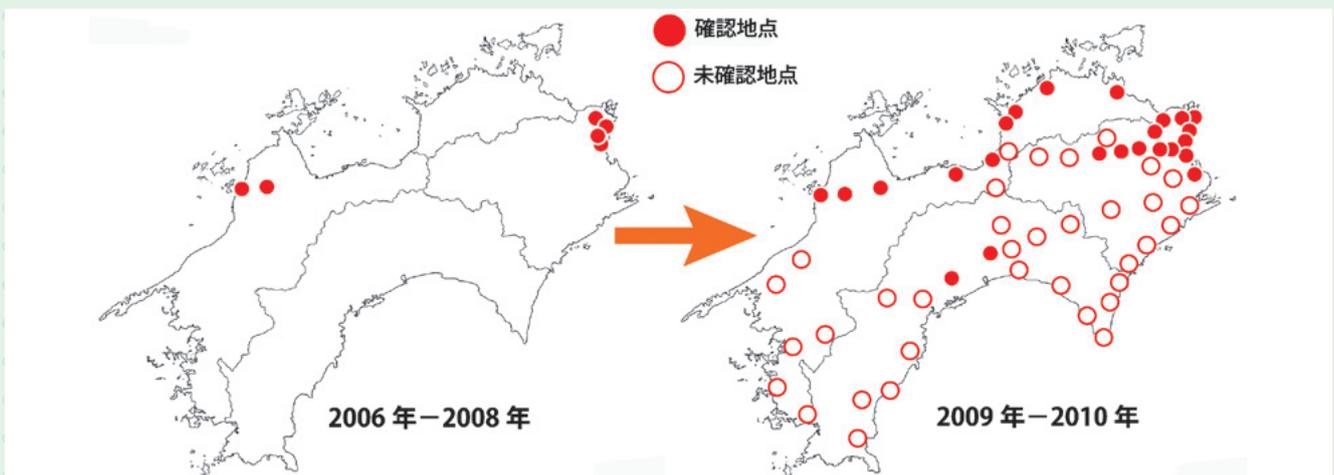


図2 四国におけるヘクソカズラグンバイの分布状況 加藤・山田(2010)より

ています。四国では、2006年に松山市から報告されたのを皮切りに、2008年には徳島市と淡路島の洲本市からも確認されました(図2)。2009年には、愛媛県四国中央市と香川県観音寺市(香川県の初記録)から発見され、2010年には、愛媛県北部、香川県瀬戸内海沿岸部と分布がさらに広がりました。徳島県では2010年の時点で、西は穴吹町までの吉野川流域、南は阿南市までの沿岸部で確認されています(図2)。果たして、今後どこまで広がっていくのでしょうか？

### アワダチソウグンバイ

*Corythucha marmorata* (Uhler, 1878) (図3)

北米原産の本種は、2000年に兵庫県西宮市で初めて発見されました。当時は大阪湾沿岸部に分布していたため、船便で運ばれてきたと推測されています。セイタカアワダチソウに寄生するほか、同じく帰化植物のオオオナモミやブタクサなどのキク科植物を好みます。発見されてからまたたく間に生息範囲が広がっていき、今では本州、四国、九州のいたるところで見られるようになってしまいました。徳島県では2005年に県病害虫防除所によって発生が報告され、その後は県内各地で確認されています。時に栽培品種のキクを加害することがあるので、注意が必要です。



図3 アワダチソウグンバイ

### プラタナスグンバイ

*Corythucha ciliata* (Say, 1832) (図4)

北米原産で、2001年に名古屋や横浜、北九州などの港近辺で発見されました。船の積み荷とともにやってきたと考えられています。街路樹として植えられているプラタナスに寄生するため、被害がひどい場合、葉が白化して景観が損なわれるおそれがあります。幸運にも、徳

島県内にはプラタナスが植栽されているところがあまりなく、大きな影響はないと思われます。



図4 プラタナスグンバイ

### おわりに

これらの外来のグンバイムシは、驚異的な速さで分布を拡げ、すっかり日本に定着してしまいました。短期間のうちに生息範囲を拡げることから、車や鉄道などに付着して拡がっていったように思われます。また、ベランダの洗濯物に付いていることがたびたびあります。おそらく風に乗ってどこからともなく飛んできたのでしょう。このことから、かれら自身の分散能力の高さも推測できます。

ここに取り上げたグンバイムシは、いずれも私たちの身近にいる昆虫です。しかし、このような数ミリ足らずの小さな虫が海を渡ってやってきたとしても、私たちにとって何らかの影響がなければその存在すら知る由もありません。身近にいる小さな昆虫が、実は外国からやってきた侵入者だった…といった話は少なくなく、日頃から身の周りの虫たちに関心を持っていただければと思います。

(動物担当)

参考文献：加藤敦史・山田量崇(2010)「ヘクソカズラグンバイは淡路島経由で四国へ侵入したのか？」(日本昆虫学会近畿支部2010年度大会ポスター発表)



# 徳島藩士の交友の証

## ～森川宗次の遺墨墳を訪ねて～

徳島市南佐古六番町にある臨済宗妙心寺派の大安寺は、阿波藩主蜂須賀家のかつての菩提所です。今は物静かな佇まいのお寺です。

境内に広がる墓地の南東縁、山際の一段高い場所に縦高 153cm の石碑があります(図1)。正面に「阿波國故内小姓士森川宗次遺墨墳」と刻まれており(図2)、阿波藩主の奥小姓を勤めた森川宗次の遺墨を祀った碑と知られます。向かって左の側面、背面、右側面へと、宗次の事跡および碑を建てた趣旨が漢文で記され、末尾には「寛政六年三月廿五日」の年記、「征夷府奉朝請待問儒員柴邦彦撰／征夷府内右筆局直事 屋代弘賢書」の撰者および書者名があります(図3)。

宗次の履歴は、森川家の家譜『成立書並系図共森川百助』(徳島大学附属図書館蔵)に載っています。碑文の内容については、徳島大学名誉教授であった故竹治貞夫氏が、読み下しと丁寧な注釈を残しておられます(同氏編『阿波碑文補集』1-16頁 1995年2月 私家版)。

宗次は諱を叙茂といい、家禄 250 石で森川家 7代目を称し、安永4年(1775)から没する寛政5年(1793)まで、藩主蜂須賀治昭の奥小姓を勤めました。治昭は自ら書を嗜みましたが、筆と硯などの管理をすべて宗次に任せるほど、彼に厚い信頼を寄せていました。宗次はまた書作品を模写する技術に長けていました。

寛政4年、老中松平定信の意向により、儒学者の柴野栗山、和学者の屋代弘賢、絵師の住吉広行らが、京都と奈良にある古寺社の宝物を調査します。これは天明8年(1788)に焼失した内裏が、古制によって再興されたのを機に行われました。治昭は、宗次を御内御用として調査に参加させます。碑文によると、宗次は老僕 1人を従えるのみの質素な姿で、一行にうち交じり大いに楽しみました。京都五山や南都七大寺に出入りし、雪の中を信貴、当麻、多武峰の山々に分け入りしました。建物に梯子をかけて額字を写し、崖をよじ登って石碑などの拓本を採りました。夜には屋代弘賢らと品評して写しを作りました。



図1 森川宗次遺墨墳  
寛政6年(1794)建碑  
柴野栗山撰文 屋代弘賢書



図2 森川宗次遺墨墳(正面)



図3 森川宗次遺墨墳(右側面)  
年記や撰者、書者名などが刻まれている

宝物調査の成果は、栗山が『寺社宝物展覧目録』にまとめて幕府に提出しています。調査の様子は、弘賢が随筆『道の幸』を著して広めました。宗次は藩に戻ると、褒美として 50 石の加増を受けました。彼を派遣した治昭の並々ならぬ関心の高さが窺えます。

森川宗次遺墨墳は、栗山や弘賢などの調査仲間が、江戸で埋葬された宗次を悼んで、翌年に故郷の地に建てた供養碑です。竹治氏が「保存良好」と評されたように、弘賢の書を刻んだ文字は、今も碑面に偲ぶことができます。建碑にいたる背景、碑文の内容、撰者、書者、保存状態など、色々な角度から再評価してみたい貴重な歴史遺産です。

(美術工芸担当：大橋俊雄)

※写真は、大安寺の許可を得て掲載しています。

# 徳島の「ジンゾク」

「ジンゾク」、はじめてこの言葉を聞く方にとっては何のことかわからなかったと思いますが、徳島の方は淡水産の小型ハゼ類のことを、親しみを込めてこのように呼びます。高知県や近隣の地域では、「ゴリ」という言い方もします。こちらの呼び方に、なじみがある方もおられるかもしれませんね。

川や湖沼に住む淡水魚には、分類学的には様々なグループが含まれますが、大まかに見るとコイの仲間(コイ目)とスズキの仲間(スズキ目)とその他の仲間とに分けることができます。スズキの仲間の大部分を占めるのが、実はハゼ科の魚なのです。そして川に住むハゼ科の魚のほとんどは、内湾から河口にかけて生息する汽水魚か、一生の間に川と海を行き来する回遊魚です。次に、代表的なジンゾクをご紹介します。



オオヨシノボリ：ヨシノボリ属の中でもっとも大型になり、一番上流まで遡上します。流れの速い早瀬を好みます。



シマヨシノボリ：中流域まで遡上し、早瀬は避け、主に平瀬に生息します。



ジンゾクには  
いろいろな  
ハゼがいるのね

徳島県の川に住むハゼ科の魚がみなジンゾクと呼ばれているわけではありませんが、ほとんどの場合、ヨシノボリ属の魚を指しているようです。在来のヨシノボリ属の魚には、ゴクラクハゼ、シマヨシノボリ、クロヨシノボリ、オオヨシノボリ、ルリヨシノボリ、トウヨシノボリ(縞鰭型)、カワヨシノボリの7種がいます。その他に、ヨシノボリ属に近縁なチブ属のヌマチチブの幼魚もジンゾクと呼ばれることがあります。これらは種によって微妙に生息環境が異なりますが、上流～下流域の瀬を中心に住んでいて、比較的目立つので、川遊びのときなどによく出会う、身近な魚と言ってよいでしょう。(動物担当：佐藤陽一)



ゴクラクハゼ：下流域までしか遡上しません。平瀬やトロ(浅い淵)に生息します。



カワヨシノボリ：回遊魚ではなく、一生を川ですごす純淡水魚です。上流から中下流の平瀬やトロに生息します。



ヌマチチブ：中流域まで遡上します。成魚は流れのゆるいトロや淵に生息しますが、遡上期に幼魚は平瀬や岸際によく群れています。

# ようかい妖怪ゾロゾロ

中世の人々は、道具類や自然など、身の回りのあらゆるところに、多種多様な妖怪や怪異現象を見いだしていました。

中世における妖怪のイメージは、『今昔物語集』をはじめとする仏教説話や、「百鬼夜行絵巻」と総称される絵画などにかがうことができます。

百鬼夜行絵巻は、いろいろな妖怪たちが現れ、夜明けとともに退散する様子を描いたものです。カラー図版がたくさん掲載された本が出版されているので、手に取って楽しむことができます。

当館にも、百鬼夜行絵巻の一種である「化もの絵巻」があります。写本ですが、最近の百鬼夜行絵巻の研究を踏まえると、原型は中世に制作されたとみてよさそうです。では、いくつかの場面をご覧ください(下の写真)。

現代のマンガのように、ユーモラスな妖怪が多数現れています。動植物や道具類などがもとなったものが多く、学校の教科書などで有名な「鳥獣戯画」のような雰囲気もあります。

こうした絵巻物を通じて、はるか昔の人々の心の世界を知るのも、歴史の楽しみ方のひとつです。

(歴史担当：長谷川賢二)

◎百鬼夜行絵巻について詳しくて楽しい本

田中貴子・花田清輝・澁澤龍彦・小松和彦『図説 百鬼夜行絵巻をよむ(新装版)』河出書房新社、2007年  
小松和彦『百鬼夜行絵巻の謎』集英社、2008年



- ① 建物から妖怪が出てくる
- ② ガマが牽く車に巨大な顔の妖怪が乗っている
- ③ 田楽を見物する妖怪
- ④ 田楽に興じる妖怪



わあー！  
いろんな妖怪がいて  
おもしろいね。



# 重さをはかるために使った 昔の道具を教えてください。



重さをはかる昔の道具を2つ紹介しましょう。1つ目は、天秤秤(図1)、2つ目が棹秤(図2)です。理科の授業で習ったてんびんや天秤の仕組みを思い出してください。どちらも、支点を中心にして両端にはたらく力(重さ)が同じなら、つり合って竿が水平になるという仕組みを利用した秤です。



図1 天秤秤

天秤秤は、中央を支点として竿の両端に皿をつるし、それぞれに量りたいものとおもりののせませす。つり合って竿が水平になったら、のせたおもりの重さがものの重さだとわかります。

棹秤は、取っ手(ひも)を支点にし、片側にある皿に量りたいものをのせたり、かぎにひっかけたりし、もう片側にはおもりをつるして量ります(図2は、かぎにひっかけるタイプです)。このとき、棹が水平になる位置までおもりを移動させ、支点からおもりまでの距離が、支点から量るものまでの距離の何倍なのかを目盛りを使って読むことで重さがわかるという仕組みです。支点から量りたいものとの距離は動きませんので、おもりを遠くに動かしていけばいくほど、重たいものを量ることができることとなります。棹が水平になった位置で支点からの距離を目盛りで読み(図3)、 $[\text{おもりの重さ}] \times [\text{支点からおもりまでの距離} \div \text{支点から量りたいものまでの距離}]$ で重さが量れます。

天秤秤は、両替商や商家などでしばしば用いられました。そこでは、秤は固定され、いくつもの分銅が使われました。

一方の棹秤は、魚売り、野菜売りなど商売の人から、米など農作物の重さを量るのにもよく使われました。携帯用の小型のものから、米俵など重いものを量ることができる太く長い棹秤まで、いろいろな種類が用途に合わせて使われていました。

(民俗担当：磯本宏紀)

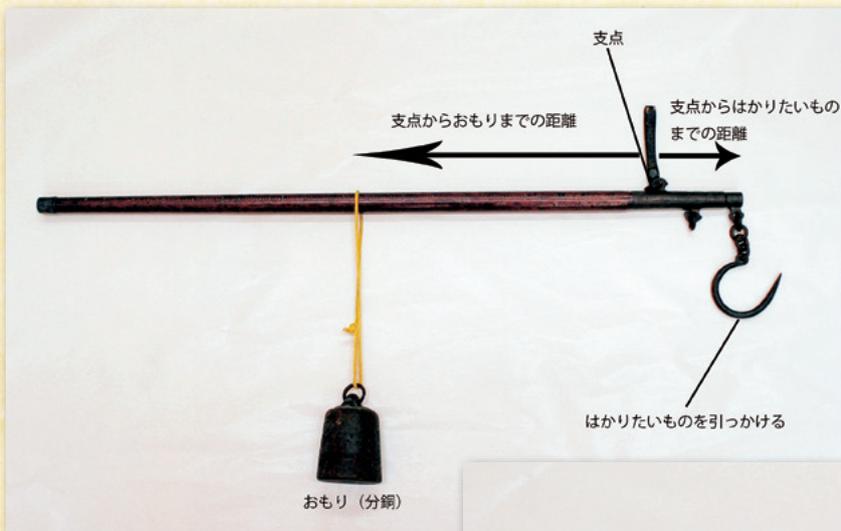


図2 棹秤



図3 棹秤の目盛り

1月から3月までの博物館普及行事 あなたも参加してみませんか？

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	申込	対象(定員)	備考
室内実習	ミクロの世界—電子顕微鏡で小さな化石を見よう	1月15日(日)	13:30~15:30	要	小学生から一般(10)	
	アンモナイト標本をつくろう	2月26日(日)	13:30~15:30	要	小学生から一般(20)	材料費300円 (大学生・一般)
	落ち葉の中の生きものたち	3月18日(日)	13:30~15:30	要	小学生から一般(20)	
歴史体験	古代の乳製品をつくろう	1月22日(日)	13:30~15:00	要	小学生から一般(20)	
	トンボ玉をつくろう	2月19日(日)	13:30~16:30	要	高校生以上(20)	材料費100円 (大学生・一般)
	やじりをつくろう	3月4日(日)	13:30~16:00	要	小学生から一般(20)	
野外自然かんさつ	冬の植物と昆虫	2月5日(日)	13:30~15:30	要	小学生から一般(20)	
ミュージアムトーク	大坂のなかの阿波・徳島~人と経済・文化の交流~	3月11日(日)	13:30~15:00	不要	小学生から一般(50)	
歴史散歩	国府町歴史ウォーク	3月25日(日)	10:00~15:00	要	小学生から一般(20)	現地集合

◎小学生が参加する場合は、保護者同伴をお願いします。

普及行事のお申し込みについて

- ◎1枚の往復はがきで、1行事のみ申し込むことができます。
- ◎行事日の1ヵ月前から10日前までに必着で右記までお申し込みください。
- ◎返信用はがきの住所・氏名も忘れずに記入してください。
- ◎希望者が多数の場合は抽選とし、詳細は当選された方にお知らせします。
- ◎原則として、参加費は無料です。

往復はがき記入例

<往信の表面>	<返信の裏面>	<返信の表面>	<往信の裏面>
50 〒770-8070 往信 徳島市八万町 向寺山 徳島県立博物館 普及課	何も書かないでください	50 〒□□□□□□ 返信 あなたの 郵便番号 住所 氏名	1.参加希望の 行事名 2.参加希望者 全員名(学年) 3.住所 4.電話番号

※お問い合わせは、徳島県立博物館 普及課へ(電話 088-668-3636)

博物館 V キングスペシャル —サイエンスフェスタ in TOKUSHIMA—

日時:2012年2月11日(土・祝)  
 会場:博物館2階 常設展示室 ※参加無料



「博物館 V キング」 昨年の様子

今年も昨年に引き続き、「博物館 V キング」を行います。当日は、楽しい催し物がたくさんありますので、多数の方のご来館をおまちしております。

- 催し物(予定)
- ペットボトル顕微鏡
  - キューブパズル
  - 漂着物工作
  - クイズラリー



博物館友の会 行事のご紹介

2011年10月22日(土)~23日(日)、友の会行事「秋の山陽路一泊研修の旅」を行いました。会員30名が参加し、有意義な研修旅行となりました。

- <研修先>
- 笠岡市立カブトガニ博物館
  - 福山市「鞆の浦」
  - 広島県立歴史博物館

- ◆2011年度今後の行事予定
- 1月15日(日) ミニ青銅鏡を鋳造しよう
  - 3月11日(日) トコロテンづくり



「秋の山陽路一泊研修」の様子